



^ 13
2898
3



門へ 13
2898
3

冬三年庚七月辰江左有

檢五冊之内

四
尾定

張喜

災幸

近世 新話 雲晴間雙玉傳第一集卷之三

第五回

才子と倡行く靈魂志と告ぐ
轎子と嬰して餘江異姫小遇ふ

東藩 官田南北編次

昭和 七月 四日 購

此時しも司駄二郎の後の方小聲りりり頻小喚者有れば。何奴なうんと四下と見るふ人蔭りりりふ見へず。こゝ我と若年と慢て狐狸の類か欺くなうんと思ひふれば弱と見せしと立止て聲とけ。今吾濟と喚うけしは狐か。放狸なる放形と頭せしと敦圍キ喚る其内小紫龍尚在可小鳴動し不測や塚ハニツ不分れ忽然と一人の異人

双葉傳

頭れ出まば司駄二郎竹鐘突立進より。油断と見濟し撞
 倒さんと。平日不似げなると勇氣のいきなり異人の呵々や
 あざざ笑ひ洪鐘のしるしと聲と出し。やよ少年よ慥と
 ね吾の狐狸の類不ありと。今日此所あく果敢あくも討
 せし大蛇は靈魂なり。首是不大夏の機密なり。和主ふ
 告く我存念と續人為不這處へ誘引寄しを知らざりや心を
 静て吾云處とトツクと聽秘司駄二郎和主今人間と生れ
 とまじも。前生の唐山の晋安郡の湖中不住し。大蛇の生れ
 來し。昔日太明の四世宣宗皇帝の在位宣徳三年本朝綱目
 院正長元年。不當此年。五月廿日。獵人の為不殺とせしり。正
 月十八日。利義持卒也。

遂小人間と生れ來り。去る天文二年癸巳四月初、日
 異生し。時同年同月同日。和主のいまを是と知ます。疑ひ思
 同刻に蛇蝎の因縁是を知らず。和主のいまを是と知ます。疑ひ思
 り母が與し。錦の袋をむき見よ。自と知る夏あるべし。
 と云ふ不測さ壯夫も首ふうけける。錦の囊と拿出し。手
 手早くも繙々と開き見る。果しと生れし。年月支干と
 書印して包し。是即臍帯と司駄二郎の其身の生れし。
 年月支干の彼異人が言ふ此も違ね。叔你と思へ。油断
 せも又誥寄て敦團荒く。らんあし。らんあし。らんあし。妖怪奴
 へ唐山の大蛇の再來なるも。せよ。即今生の陽入。浅間
 浅間しき妖怪と言とか。らんあし。らんあし。らんあし。大人氣なり。や去んとす。

彼異人口ふ咒文と號バ司駄二郎ハ思はずも後方
 とちと引戻さる心地して地上ふらた座しな
 鍵く込詰寄て汝大蛇の雲魂不相違なりバ吾一箇の功
 見せよ然らば云々聽與んと云異人の阿々と笑ひ和主
 尚も某と疑ふ々々云云功々々何あう見も人きや尚云
 閑まふ今和主が繙開一錦の囊ふ少き角の如き物ありこ
 和主が生まし時掌の中不握るる即前生の蛇蝎る時
 額ふ生ぜし東西たのりどよろ和主が幼稚のとき不例
 のりふ母親が削て吞せん痔虫の症も忽地治まる大妙
 藥斯まづく先見分解るる吾云々と疑ふ欵吾今和主が身と

借り魂を送り氣を與へ存念の程と亞しめん吾心中の
 憤りを心静て閑より吾昔より此山に住まはるる數百
 年多津雌と云て雌の大蛇と最睦く年月を送る内ふ
 情をや多津雌ハ恁々の故あり人の為ふ命を取られ
 人間ふ生を改早くも岳曾古が娘あり異と生を來しふ
 吾ハ悲しや雌と拿らば無念の余り如何なりて此一郡を
 湖水となさんと思ひしがやうく此頃時を來るる手
 下の虫類八万四千と召集んとせし處が太平二の妻藤波
 多津雌が為りも恩深ういうもいと此人がけ助んと思ひ
 じん是ど此身は離とありて語りうるを一大変と云て人

又玉傳卷之三



又三傳卷之三

〇三



又三傳卷之三
ふと迷ふみちをりえと聞たり
そとどきとみちをりえと聞たり
莊児誘霊魂告志
なまのこころをまをるゑと魂

又三傳卷之三

〇三

味吉郎

な洩もあ。と口止せしと藤波ハ。生徳人小情あり。性ありけれ
ハ其身を厭ふも。渾夫太平二小。悲しや大哀と打開らむ。口
惜さの余り。命ハ己小拿れども。観音菩薩の利益の故ふや。
那人ハ最有ぐくも。蓮臺小生せらむ。斯て岳曾古
太平二小。此由三木元訃へり。長則主の命と受浦上大
學諸共小。此山と涉獵り。時吾ハ密小地小潜り暫し形ハ
陰し。これども。長則主の明察も。忽猛小狩出さむ。無念や
名古う箭先小か。數百年間此山小栖棲となし。と出沒不
測の自在と得くる大蛇ありども。命數這里小盡果て遂小
此天神山ハ。草葉の露と消れども。忘愁の一念終る。和

主小由と打開て思ひの存念告人爲く。今より和主我二より
別所家へ拿れくる。名玉と取く。異姫と夫婦小成也。此天
神山小塞と構へ。四方の英傑と味方となし。播磨一國を切
順へ。隨ふ者ハ味方となし。逆ふ者ハ民莊客武家諸侯ハ嫌
あ。片端より打潰し。威旗と播磨小輝して。名と後天小遺
せよう。と。功業成得まむ。此天神山小構籠り。名玉と
身と放とまむ。百年千年を經ると云とも。齡ハ尚も十五夜
の月の姿ハつら追も。かきくで壽命ハ天地と共小長く榮利
と謀べし。和主いま。巽小遇ね。其回形ハ知るよし。ある
ま。只同し。名玉と持し。女ハ巽く。環り遇まむ。此由と語て

又玉轉

夫婦と成よろ。且又和主が先祖と見る。南朝不仕へまら
 脇屋右少将義助主の忠臣。三倉刑部左衛門尉
 龍の後あるぞよ。疑ひ思ひ家小く。その庭と埋て見よ必
 一の太刀ありん。その先祖凭龍が。脇屋主より拜領せし。雄龍
 丸の名刀あり。察する。和主の源氏の流あり。
 今より先祖の名字と續三倉と改て紫宅二郎源行
 龍と名乗べし。和主が先考の司馬六も。原の三倉源吾と云
 一。武士ありしが。家風斯迫衰微せし。名刀久し。地小埋
 陰氣の災あす由へあり。足利家の王家の怨敵のり。今
 て覘より。一太刀怨を報あ。先祖へ大ある大孝なるべし。今

足利家武威衰へ五十年と待む。其家必絶果べし。とて紫宅
 二郎頭掉。足利家の天下の武將。吾済は是村野の匹夫。いんを容
 易小討支得んや。と詰。紫宅雄の靈魂。その愚痴之紫宅二郎
 た。如何なる大敵あり。一太刀怨小難き支。あるるを
 や。上某這首。雨と呼風と起。雲小のり。形と
 隠を妖術と。悉く授くべし。近ふ來ま。手招き。何故秘文と
 最末。授ふれ。紫宅二郎。喜び勇んで異人小向。口訣儘
 納解せり。試小一行。行ひ申さん。披見あ。両眼と閉口の内。秘文
 と誦せ。一天俄頃。曇り怪。黒雲地より起。紫宅
 二弟。身と踊。雲小飛乗。紫宅雄の靈魂。是と見。手

と奉て大子稱し。和主の宴に秀才子。一と聞て十と察も。早くも奇術と
郊得く。行ふ妙と見も。それどころと某が。存念と果さん。夏さうし
疑明なり。かへもくも吾言し。語と忘るく夏あられ。やさうぶ帰
らんと。云うや思へば姿の忽地。氷の朝日小解が。う。消こ跡あく鳴
らる。山の響も遠近人小見とが。やうと悪かりたんと。雲に乗て宇
宙と行ふ。心の自在あり。ざる夏あう。心の内小獨り。笑て歩行もを
吾家の軒小早く。回り着ふりり

東西亭南北附言し。て。ら。分解てあるを。世の看管此一回は
文意との。一書の大意と知り。給へ元來此書ハ播筋一揆ハ傳
記と録も。然もくも其因縁ハ。つら成ゆへと知るよ。な。れ。や。

紫宅雄が今蛟倉子示せ。一。つ。が。奥秘あり。凡此書を讀む人此一回ハ
意と止る。雲の晴間ハ一揆起り。二顆の名玉世小出く。光と四方ハ
あ。り。せ。是。発端と云ま。く。の。み。雙玉傳の名ハ首是。小。よ。ら。く。
号る。よ。う。ハ。簡端。小。あ。り。の。り。記。せ。や。れ。念。の。為。小。再。録。せ。り。
さ。て。も。別。所。充。京。推。亮。長。則。朝。臣。ハ。近。習。外。士。と。引。連。て。三。木。城。ハ。隔。着。有。
蒲。上。大。學。御。歸。館。と。賀。し。岳。曾。古。も。城。下。ま。ま。御。供。し。て。送。り。ま。
す。夫。より。御。暇。給。り。て。急。ぐ。瀧。野。へ。入。り。來。り。扱。夫。より。も。一。家。と
集。へ。い。よ。明。日。藤。波。が。葬。式。と。當。む。べ。夫。小。付。て。娘。翼。も。焼。香。の。場。へ
立。さん。と。思。へ。ども。六。七。ハ。い。ま。ご。か。り。來。ず。加。之。妖。蛇。ハ。其。姓。懸。深。
者。也。今。一。旦。亡。ぶ。や。又。い。ども。余。怨。や。や。此。頭。上。小。佳。回。し。て。又。い。つ。あ。る

災と娘不見せんも計らうとわたり。よろしく思ふ今二三ヶ月の尻崎
 小預け置べし。よやく世上穩う。蛇蝎の祟りも銅波離止る。其
 後小喚かきさんとも。さて葬式の准構となきしむる。其格食
 禁の品曾古あまむ買物等ハ一々自帳面小記し。一錢二錢と争ふ
 て葬礼とたより小東西貫小来し。乞食迄も飯一口づも施さず
 度と禁し。寄集り人々と芥のどく云ちうし。念佛ハ一口
 ぐも称む。斯く其夜も初更の頃ハ猛可門辺小ざらうし。人ハ
 倒る音しう。何更やさんと下部ども立出く見むぶあつ
 小昨日六七八等と諸共小巽と尼ヶ崎へ送り行。轎舁の文字
 不しく。最正直なる男あり。諸人又も驚く。先家の内へ舉持て

入氣付と呑し水と吹うけ。耳原小憑く文字介々々々と幾回喚
 くれがやうくふして息吹う。四下と如驚々々見廻して。半時
 たりうり候まし。現小似る。面の色さ人最青う。太平二
 恁と閔よりも驚くま出。文字介が背ととこと打心得
 ぬ汝う形姿。且又六七八今一個の相棒のつを。巽ハ駢山北
 丹吾小預け置しやう。問ま。文字介やうし。始て心
 の付し。且那太平二様欵又大変小及びう。娘さむの悲し
 や賊の為小勾引されて行方知ま。成給へり。閔て太平二物り仰
 天何と云娘巽ハ賊小早くも拿れし。探れ小探まて聲さ
 出ま。青ふあり赤ふありて暫く言む。やうくと心を静子細ら

いふと堰にて問は文字介胸撫おろし。是れ段々物語りの最
 長中ふひに子細あり。諸人ふへ白地ふら云ぐこか。願ふ且那
 密りと。由と語りやさん。云は太平二頭頭て。最奥よりたる所
 へ伴ひ。四下の人と遠く退け。扱其由と問う。きふ。文字介の両手と
 つき。小聲ふ成てやや。昨日の朝六七八や。我々よりて娘さ白と
 やりくま。りり。轎ふ。乗まつ。せ。道と早め。攝劔さ。急ぎ
 急ぎ。思ひ。より。道敢果行む。其日の申下刻の頃。鶴越上
 さ。か。ア。小。險々。山勢ハ。さ。義経の跡と追九打あ
 山路ハ。畠山の馬ふあり。喘々てや。木生の繁ふ。かり。
 行先の道。す。険。苔最滑かり。焦る。思ひ。行

ど一群の盗人四五名。畠の竹げより頭を出中。も魁主と思。ま
 の。年の頃三十余り。三四年ふも成。成。眼つ。色白
 く鼻高。列と放。大道ふ。出。声と荒ら。や。れ
 の。等。小。閔。吾等ハ。此頭地。人。の。東。西。と。割。奪。て。
 酒代。小。守。剪。経。其。轎。の。内。大。金。小。成。代。東。西。と。入。子。算。五。算。と
 反。風。波。離。と。這。方。へ。其。か。り。三。厘。五。厘。の。鬘。首。と。
 ま。け。其。方。へ。戻。得。さ。せ。轎。の。代。東。西。勿。論。汝。達。が。衣。類。追。の。と
 ら。守。置。く。算。算。の。猫。追。ま。り。や。あり。と。や。逃。去。ま。り。去。よ。
 斯。云。我。の。名。や。お。欺。棄。ふ。名。と。得。一。鯰。江。濡。九。郎。跡。よ。り。釣
 根。権。太。犬。飼。碗。助。馬。又。九。郎。平。田。名。の。仲。間。へ。衛。妻。奴。の。礎。り。と。入。手。せ。り。

請取書ハ跡より遣う。補味ハ伏降て四名の悪棍早轎ハ手と懸る。六七八ハ恐れあがり悪棍等ハ打向ひ。和主達の目遣あらん。是ハ金くさる女ハいひいひと云せも果も濡九郎。誦うる声と荒らげて。云はらへ。一丈奴轎の内なる銜妻奴ハ龍野の卿士岳曾古云痴者ハ一箇娘の翼といふ奴吾いふよ。此銜妻と耳く手ハ入都へ連行。遊君ハ賣ハ二百兩や三百兩ハ寝おぶとよ。貸べしと早くも思ひ付くはとめり。おろく家近く忍び行心と付て窺へども。さすガ郷士の二講容易ハ近付支あこはず。是非あへ今さうくもとせし。嬉しや時第巡り來て今朝も閑と岳曾古許の騷動尋常をらまとして。藤波と云女ハ大蛇の祟く忽ち死そが娘ハ翼奴ら

轎少く尼ヶ寺ハ送るやと。是此釣ヶ根の推太治郎。早くも関付某ハ恁々と告し。場所を選ば。此所へ網と張しと知らば。來りて汝等ハ不運と思し。銜妻奴とあちち渡せや。喚びる声の下より。釣ヶ根推太飼碗ハ又九郎平。支る六七八突のけ。轎と取んと飛めると先捧の万ハハ渡さ。東西とさくさく。所と後ハ控し。濡九郎。三尺余りの大脇指と抜手も見せむ。切創せば。アツト計りハ万ハハ後へぞ。倒れ死む。恁こハ叶わ。つらハせんと跡捧の此文字ハ逸早くも身と轉へ。最繁々くる叢の中へ身を藏し。口の内ハ念佛と誦へ。がく震て窺ふと。悪棍等ハ是を知らず。跡捧奴ハ逃去りし。と謚

又三徳能之三

九九

かぐろく六七八討く鬼を此方もとらさず。抜合して切結ぶ
ふつて濡九郎敵し得人肩先丁ご三寸計り切下げられて
兵兵し。ひるむ所と濡九郎のがけつて六七八が胸先と突
通せば叫びもあへど七轉八倒遂ふ空しく息絶えり。濡九郎あぞ
と笑ひまづ邪たのうづけり。さう代東西一見して疵をらつと
改めんと。轎の傍ふ立寄て御妻菩薩早出給へゆ斯なつてふつと
ふ嘆くく甲斐のあるべきや。早く尊き光明を拜せ給へや濡九郎が。
やと轎の戸開く所と思ひもけど異姫。濡九郎が腕と掴み三間を
アどろどろと投除頭を出し井勢花の姿へかろねども。勇士も及むぬ
手練の早業。残りぬ悪相是と見てのぐいせと三名が手拿ふせん

討く鬼多と異有あふ体技あつ取り。打まぐ擲合ふ美人ふ似げをき
奮撃勁勇。死活と討く三人の轉倒うつ息絶えり

第六回 談細書文字今禍ふ遇ふ 碎瑞石行龍名刀と得る

此時も濡九郎ハ二間計り投付らるる。やうと起上り。痛み
つむ腰撫さす。訥誦々と謚きながら。何奴を今這所へ
鯨江坂と投つて。巽がそとへ立寄て顔と詠めく怖りし。四方
見れば仲間の三名。這里那里ふ倒れあればさそへ心も愕あぐ。
弱きを見せしと両肩ぬき。頭結あやう尻引まらう。敦圍荒くやよ
銜妻汝ハ太平二が娘。深き閨ふ人とあり。日の方も常に見えさ人



志乃浪のちのけろく二枝乃
おんかのおとめおんがとあへは
艶顔小嬢暗顯蛇志
左ね千折ゆおのうあ一乃

又五傳卷之三

〇三



又三傳卷之三

せざる小婦郎が何ゆふ某己が手下と。投殺し。汝奴と都下連行て。
 旋君子賣人と思ひし。形似合ぬ手強い術妻打殺して三人の敵
 と取ん覺期せよや。と刀と振て切てかると。巽ハ得しと身と
 かす。刀をとり取心打ふ。丁々ハシと打まゆ。ハカ身切し。鯨江
 鯨のてくグニヤくと。打伏らして手と合し。助給へ。叫びたり。巽ハ寛
 尔と微笑をく。汝達ハとも吾濟と尋常ハ少婦と思ふや。吾ハ播
 磨加東郡。天神山。年經し。大蛇の再來なるふあり。學さむも武
 藝もあり。且加ふ。隱形ハ術さ人もよく知る。書ハ又幼雅時より
 して。龍師。就て讀得し。大蛇ハ。あつて。大蛇ハ。あつて。大蛇ハ。あつて。
 ねども。和玉も原ハ三木の東。長屋村と云。所の。品壺大明神といふ。

神垣の其古き澤。住。鯨の再來なる。どく。證ハ。肩口。小
 似し。瘧のあり。こと。藏さん。とて。汝密。龍の。黠。あ。つ。ん。這。言。少
 しも。違ひ。な。ま。ま。又。其。名。も。お。の。づ。う。鯨。江。の。濡。九。郎。と。号。し。も。是
 妙詮の。な。を。処。ある。と。知。ら。さ。る。や。今。より。汝。吾。不。仕。へ。く。主。従。の。盟。と
 なる。他。日。吾。天。と。求。め。天。神。山。小。構。籠。ら。ん。と。思。ふ。心。ハ。常。不。止。む。其
 時。汝。と。り。一。方。の。將。と。せん。此。儀。と。心得。い。ふ。り。て。軍。用。金。と。集
 め。よ。う。吾。ハ。是。より。暫。し。此。間。山。小。あり。り。て。尚。此。上。ハ。大。學。武。藝。と
 凝。ま。す。べ。し。他。日。の。再。會。待。べ。し。と。云。小。鯨。江。且。駭。き。且。感。じて。云。々。る
 よ。う。思。ひ。け。け。を。珍。論。綺。話。と。聞。て。小。可。も。胸。の。雲。さ。ら。り。り。分。解
 一。姫。さ。ぬ。の。來。歴。聞。て。感。佩。せ。り。願。ふ。今。より。家。來。し。も。見。と。あ。り

給^{たま}ふ^び不及^{おぼ}な^から^ず一臂^{ひと}の^ぢ力^ぢと^て盡^つく^て共^{とも}小^こ更^しと^起さん^あり^愕き^こ
 へ^へ一^{ひと}姫^{ひめ}さ^らぬ^れ武^ぶ藝^げあ^りと^もか^んど^ろり[。]此^{この}時^{とき}異^いハ^濡九^く郎^{らう}ふ^又打^{うち}
 向^{むか}て^まり^すす^や。悠^うる^因あ^り汝^な女^に大^お更^しあ^もと^も打^{うち}開^ひく[。]必^{かな}
 む^ど人^{ひと}ふ^な世^よま^とと^ろう^ず。云^いふ^らき^き更^しも^是ま^であ^れば^いぢ^や是^{これ}よ^り
 立^た分^ちま^えん^又倒^たれ[。]三^{さん}人^{にん}ハ^汝活^{かつ}と^入り[。]悉^{しつ}く^戻る^べし[。]と^示き[。]
 言^いふ^濡九^く郎^{らう}益^{えき}々^々感^{かん}じ^て涙^{なみだ}と^流れ[。]今^{いま}更^し小^こ姫^{ひめ}さ^らぬ^ふ分^{ぶん}ぢ^やも^名
 残^{のこ}り[。]再^{さい}會^{かい}の^期と^待侍^{まち}ら^んさ^しと^互の^言異^いハ^眼と^閉
 掌^てと^拱き^口ふ^咒文^{ぶん}と^称れ[。]形^{かたち}ハ^消く^跡あ^くも[。]只^{ただ}颯^{さつ}々^々と^り松^{まつ}風^{かぜ}
 の^音れ[。]の^こす^夕暮^{くれ}と^も濡^ぬ九^く郎^{らう}ハ^倒れ[。]三^{さん}名^なふ^活と^入れ[。]
 息^{いき}吹^ふく^せん^偽て^彼術^{じゆつ}妻^{さい}奴^ぬハ^狂人^{きやう}あ^り々^々逸^{いつ}早^{はや}く[。]

摘^とへ[。]と^て直^{ちやく}價^げの^あら^れハ^追も^うけ[。]む[。]打^{うち}捨^すお^き先^ま汝^な遠^{とほ}大^{だい}
 切^{せつ}勿^ぶし[。]立^た帰^{かへ}つ[。]活^{かつ}と^入り[。]幸^{さい}僥^{やう}ふ[。]と^戻り[。]今^{いま}日^{にち}の^仕
 業^{ごう}ハ^大損^{そん}あ^もと^も百^{ひゃく}目^めの^方へ^細笠^{こさ}一^{いつ}蓋^{えい}分^{ぶん}算^{さん}喰^くく[。]量^{りやう}見^みつ^け
 て[。]此^{この}轎^{きやう}と^彼奴^ぬが^衣類^いと^腰の^東西^{せい}と^拿り^帳面^{ちやうめん}消^{しょう}く[。]い^ぎさ^久ら[。]
 人^{ひと}と[。]四^し人^{にん}ハ^先手^て分^{ぶん}と^なり[。]碗^{わん}今^{いま}九^く郎^{らう}平^{へい}轎^{きやう}と^昇。釣^{つり}ヶ^根推^お太^た小^{せう}脇^{わき}指^{さし}
 衣^い類^{るい}と^持せ[。]サ^ア行^ゆ人^{にん}と^足と^早め[。]兵^{へい}庫^この^方へ^謚あ[。]ら[。]
 行^ゆ跡^{あと}あ[。]此^{この}文^{ぶん}字^じ今^{いま}が[。]お^とろ^うく[。]い^なを^止む[。]頻^{しん}り[。]小^{せう}念^{ねん}佛^{ぶつ}と^行
 了^{りやう}。其^{その}夜^よハ^山あ[。]て^明く[。]今^{いま}且^{かつ}曉^{あけ}よ[。]山^{やま}と^逃出^{にで}道^{みち}と^早め[。]と[。]
 胸^{むね}り[。]せ[。]虫^{むし}の^上り^誥て[。]心^{こころ}地^ぢ死^しべ[。]思^{おも}ふ^更數^{かず}回^{かい}ふ[。]と[。]
 今^{いま}と[。]歩^あり[。]今^{いま}夜^よの^あり[。]は[。]張^{ちやう}誥^ご。心^{こころ}寬^{かん}も[。]忽^{たち}ち[。]門^{かど}方^{かた}小^{せう}倒^{たう}

一と遺り多く顛末と語を聞くと太平二の心の内大不慙愧し。
 計らざる這回の薄命。無念ふ無念と重し。のまけ家如瑕瑾身。
 耻辱。この上めあるべきや。匹夫の其口きつあそもの。這儘文字介を
 活置の巽が更世上不廣弘り。此身の面目失ふべし。昔唐山の韓信ハ
 道と問へ樵夫と殺して後難と巧がり。不便なぐらうも此者と這首
 あく殺しらねんぞ。飽まぐ。倭亥邪智と運らう。垂頭くら文
 字介と思ひもけむ殺打ふあびせうけくろの刀のさへ不肩先四
 五寸切下げらう。アツト叫びて倒る。所と勝りかいつし心元と只一刀
 不突貫ハ手足と張く息絶らう。血刀提々太平二ハ廣庭ふゆるぎ出
 水のくヤツト喚らうふど。心得侍りと四五六ハ手提け桶不持出る

水ハ清ど太平二ハ心濁りの血力と。指出して四五六ハ水とくしと云
 わいも。云へどもあるき心の内と積して四五六がごとくと震あぐ
 不清水と。檜抄不汲ぐ鏝元より。早くも流し弄らう。呼鳴憐む
 べし文字介ハ其性思直ある者ゆ有し更と白地ふ云て命と喪
 一ハ是や真不畏虫の火入とつ壁のど。然ども退考案むらう。文
 字介ハ命這首不盡べし。其故らんと尋ふ巽ハ蛇蝎の再來ゆ最包む
 べし一大更と料む聞らう。其身の素生と顯せし更壁ハ先ハ藤波が夢
 の大更と人小語りて忽其身と亡が如し。文字介ハ今太平二が手を借
 命と不慮不落せし事。最おそるべき更ありらう。休閑題同太平二
 とらで不文字介と忽地自削ふあうらう。一家の者共大不駭ぎ恐れ

て近う得もよろうと震あぐらふ其由と問へ太平二下やう。文字介の
 元來して。律義の者と思ひいふ案違ひ。疵者へ密に賊と通同
 娘と陷るゝのころ。六七八等と判害し。猶凝むらふ某と母と
 欺き黄金と。欺奪拿人とおせし。ゆへ妻が葬り済むる内。人命を
 害する宜うくすゝと思ひいふ娘や六七八等が追善。早も
 仇を復せしめて。非と飾り諸人を欺き。色をば渾家は。最不審
 く思ひたり。扱文字介が尸成へ席に巻て野外に奪させ。其后訪書をも
 て。浦上の方。追由と届言ふ。此回家。隸文字介といふ者。密に賊
 と通同し。娘と陷入其外。二人の家。隸追殺害し。刺主へ過言せし
 べ。不得止。武士の意氣地。且罪人にて。得ば。自削。仕ひ願ふ。尊公。御

前の首尾。たのしく。別。金子。黄。二百兩計り。添て。御前の執成。たのしく。たれ
 浦上へ。是と心得て。言と飾り。長則主へ。入。此。夏。無子。細相。済む。恁。而。其
 翌廿五日。藤波が。本葬と。嘗。み。く。最。豪。家。ある。莊。官。お。ま。は。其。花。麗。人
 目と驚く。す。む。ら。り。あ。く。葬の僧。十。余。人。香。花。院。へ。く。と。送。り。く。案。下。再
 説。是。首。ま。ま。と。絞。倉。紫。宅。二。郎。行。龍。へ。雲。小。乗。の。術。を。の。く。早。く。も。家。路
 小。立。入。り。母。小。見。く。病。と。問。ふ。今。の。病。症。裡。小。入。て。一。言。も。言。む。言。む。樂。も。通
 得。ま。し。て。其。日。の。暮。方。五。十。八。才。と。一。期。く。て。終。小。空。く。か。く。た。れ。ば。紫
 宅。二。郎。の。悲。と。嘆。き。葬。の。礼。厚。く。あ。り。香。花。院。へ。送。り。く。つ。が。す。で。小。初
 七日も果し。頃心。小。不。圖。思。ひ。く。る。我。曩。も。天。神。小。奉。て。大。蛇。の。精。と。受
 け。ま。さ。し。入。始。小。似。む。武。術。力。量。自。と。得。て。今。迄。の。紫。院。二。郎。小。あ。ら。ば

一日も早く天下に縦横せん事とくくく。夫も付て此案の裏庭に雄龍丸の名刀あり。靈鬼の教し夏あり我に即雄龍丸精。然ふ又雄龍丸の名刀を得るは是を全く妙詮奇因抑名刀の那處ふあ。人試ふ埜見んりの。鏡投て裏に立出埜ども堀りもさふ又。それぞと思ふ東西さる。こゝ不審と傍をう。大さ二圍計りたる。瑛石の上へ腰うちけ。思案なりたる後より。思もうけど一箇の曲者。紫宅二郎と後より。横に抱て行くとまゐる。元是女の賊と見へ。年の頃二十計り。身の長ハ五尺七寸。婦人ふ希あり大兵あり。色白く眼秀く。面影とも醜く。す。手も麻骨う。身と固め。長き一刀腰に横へ。云でもあるき堅固の出立紫宅二郎ハ横さる。ふ抱らる。あが。足どの。

助丁と腕す。さすらの勇婦も。うら。の抱。手先のめりむ。心得。うら。のを放せん。賊婦ハ再び遁さ。と奪て鬼と身と。後へ廻。前下ふ。と倒と乗。起。と早速の。下より賊婦ハ反起んと。忤と甲斐あき無念の一声。声ふ應。て豫て。より。忍。り。人。又。一箇。是。も。同。女。の。曲。者。頭。を。出。つ。刀。と。後。持。飛。か。つ。切。人。と。ま。ら。と。得。ら。や。あ。と。紫。宅。二。郎。身。と。か。り。て。刀。も。き。奪。引。手。も。見。せ。と。脇。腹。と。グ。ツ。と。突。込。手。練。の。太。刀。先。賊。婦。ハ。噫。と。叫。ひ。も。あ。へ。ま。後。へ。と。や。と。倒。ま。ら。拍。子。ふ。鮮。血。沛。り。曩。ふ。行。龍。が。腰。け。瑛。石。ふ。洒。と。見。へ。一。天。猛。可。う。き。曇。り。蛙。の。声。も。聞。く。同。ふ。哭。つ。る。ま。行。龍。き。ら。と。打。見。や。り。噫。不。測。や。時。今。残。春。よ。と。蛙。声。

と揚さる時あり。賊婦の血鮮かると等しく。數千の蛙鳴つる。奇や艶たる好漢。小似げある今この働きの。行龍の鮮血栗原。女嬉しき闘戦人。昔比類又あり。名刀這首埋ある。と自と知らせしものなる。欽と心ゆめば。行龍が透と見込で下より。反々くくる賊婦の早業。刀と抜く切つく。紫雲二郎の銃ぞ受止。丁々ハハハ切結ふ奮勇力闘互。早業行龍銃と真向ふ。打て丁と打込と。賊婦はやせし身とくう守。たづみ打つる銃の勢ひ前ある。瑛石とハハと打より。中より出る東西とあり。賊婦の早くも拿んとせし。見り眼み遮り。さすの賊婦も思ふ。知らず。後へ寄と紫雲二郎。手早く拿て是と見る。其長さ一尺九寸の白木の

鞆に修くる。是ぞ雄龍の名刀を。人と推戴くと後より。賊婦の再び拿んとせし。手先と掴んでねぢ。上つる手練の秘奥に動き得ず。助け給へと託し。紫雲二郎の再賊婦と膝の下に。楚々き。那名刀と抜放ち。鏢本より鋒迄腫と定く。と見ふ。百余年上中。埋し刀あり。さす。一点の鏡と見せず。明晃々として正。是荆門小渡りと止。胡蘇墓の草と結ぶ。二尺の氷一函の霜。渙ふ雄龍乃形あり。殺氣と含み。打振る鋒より雲起る。山田の大蛇の宝。釘ふも。下ふ。行龍の奇妙々々。拈讀し。感聲暫に止さる。此時。下ふ。賊婦の深く紫雲二郎が勇戦早速と感入。君。と。英傑と知らず。吾。今日の無礼。ゆりさせ給り。

今よりして。沛主人とも仰べし。と云へば行竜寛尔と笑ふ。汝いとも何故
 小吾小敵せんともありたるぞ。准解包を打開く。真小吾小頼り。命の助け
 得さすべし。早く子細と開譚と引起さす。て那賊婦の横へし太刀投
 奔。猛可小形容と繕う。両手をつひく。扱云う。小吾小元原上野なる。
 白井と云所の産なり。と。幼あそ時父母小離れ。人小傭れ子遊となりて。
 十五六迄本國白井小云甲斐あり。も年月と送る内より天姓の自と
 武藝力量ありて。人皆恐とあり。るが。一時不圖人と争ひ日頃乃力量
 此時と鈍や女流小似げもあふ。一拳と當る。悲や對手小忽地。其
 場て息小絶ふり。この麻忍せり。誤つらと思へ。今小詮術あき。小直小
 夫より白井と遁出。諸國と巡り。吾武藝力量とりて。小僕儼と去る。

忍びく。小邦國と入盗き。今小僕も二十人計り。既小女の賊主とあり。
 あを見給へ。曩小君が手か。死せし女も。吾が仲間。吾小濟今の名も。
 宇薙と喚。又より。堀と傳ひ。樹小上る。妙ある。由へ猿猴女と諱名せり。
 然る。小君ハ男子。小希ある。柔容貴躰の艶美人。送る人。と勾引。繁花へ
 連行人買小賣。十分價と得べし。噫。佳也。々々と思ひ。小たれ。夜と
 あり。日とかく。規いあり。今日。今折。こ。得ら。と。服心の小僕
 儼一人引連。忍び入。今日。便宜。ら。君。此所。小く。
 何那堀せ。ふの。時分。と。横小抱。猿轡と入。遁人。と。サ
 小案小相違の。脚敷。君と。摘る。変。の。さ。て。お。き。却。小吾早。摘。と。あ。ま。ら。う。
 是を。魚と釣。んと。して。却。魚小釣。ら。ま。り。て。今。ハ。遁。ら。ま。り。

なしと思ひふらむとて。遁まて見んと心の一計。あつれ
 しまふ。小艶言のく。君の心をさうり。ふ。倒心外。小辻む。名刀と得
 給んと頼り。小考へまふ。開甲斐見へ。雄竜とやらの名刀と得
 給ひ。最不測多る。御更へ願ふ。君と御主人とも。仰まつりて。那何
 ふ。まれ。御用のあ。一臂の功と盡し。待らん。と。真實見へ。守
 難が。心底行。是と。聞よ。心ふ。其信と。あ。感懐を。し。る。が
 稍ありて。云。る。や。汝が。心底。我よく。是と。知る。ふ。足。ま。る。原。是
 の。と。有。身。み。御。方。の。出。來。る。と。大。小。好。あり。然。れ。も。准。解
 あ。り。今。其。由。あ。り。難。う。他。日。叅。會。ま。る。印。ふ。是。此。妙。藥
 と。與。之。即。是。ハ。龍。の。角。あ。り。四。百。四。病。の。外。あ。り。も。此。藥。と。用

ひ。あ。疾。ふ。痛。む。と。り。ま。夏。を。必。と。大。夏。ふ。か。す。一。と。角。と
 中。より。切。り。其。半。と。与。へ。ま。ま。守。難。益。感。拜。し。て。那。角。藥。と。受。納
 め。夫。より。暇。と。して。都。の。方。へ。立。去。り。

此。回。異。が。濡。九。郎。小。還。會。せ。し。と。同。日。の。説。小。似。し。れ。と。其。趣。き
 異。し。と。却。り。奇。中。の。説。と。云。ん。故。

舟場
 堀部

